

国立大学法人小樽商科大学事業報告書

「国立大学法人小樽商科大学の概要」

1. 目標

小樽商科大学は、経済社会の発展と地域社会の活性化に貢献し、延いては文化・人類の発展に寄与し得る研究と人材の育成を推進することを使命として、実学重視の伝統と商科系単科大学としての特徴を活かし、一層の個性化を図るために、以下の目標を設定する。

1 教育の分野

- (1) 徹底した少人数主義によるきめ細かな教育の実施
- (2) 実学を重視した教育の実施
- (3) 広い視野と国際的感覚を育てるための国際交流事業の充実

2 研究の分野

- (1) 基礎研究とそれを踏まえた応用的・実学的研究の重視
- (2) 1学部を広範な専門分野を包摂する単科大学の特性を活かした総合的・学際的研究の推進

3 社会貢献の分野

- (1) 地域社会の活性化に資する産学官連携事業の展開
- (2) 経済社会の要請に応え得る高度な専門的知識を有する職業人の育成

2. 業務

教育研究の高度化、個性豊かな大学づくりなどを目指した、教育研究活動面における特色ある取り組み

《学士課程》

- ・学部での成績優秀な学生が3年で卒業し、大学院で専門的な研究ができる制度を導入するために「学部・大学院（修士課程・専門職学位課程）5年間一貫教育プログラムを設置した。
- ・本学の企業開拓により実施しているインターンシップ（商学部授業科目，2単位）に加えて、企業等が独自で実施しているインターンシップに参加し修了した学生に対し、本学でのインターンシップ科目の履修とみなすことについて、必要な事項の検討を始めた。平成16年度の本学企業開拓によるインターンシップ実施状況は、41企業において81名の学生が履修した。
- ・本学同窓会との連携のもとに、様々な分野で活躍している12名の本学卒業生を講師に迎えて、「エバーグリーン講座（総合科目，2単位）」と称し実施している。平成16年度は250名の授業履修者があった。毎授業終了時にレポートを課し、本学教員が採点して、授業担当の同窓生に返却している。
- ・他の北海道内国公立大学と北海道進学コンソーシアムを組織し、名古屋で大学説明会を行った。
- ・入学試験委員会の入試広報・高大連携専門部会が中心となって、オープン・ユニバーシティ（地域に出向いて行う大学説明会）、オープン・キャンパス、出前講義、高校訪問、高大連携セミナー等、北海道内での志願者の確保と道外での積極的な広報を目的とする組織的な入試広報・高大連携事業を行った。
- ・夜間主コースを、働きながら学ぶ人のためのコースとして位置づけ、教育課程では所属学科を超えて自由に学習できる総合コース化をはかり、また、夜間主コースの授業を公開講座として市民にも公開した。
- ・ゼミナール（研究指導）について、学生と連携してオリエンテーションを実施し、学生によるゼミナール大会及び特色あるゼミ活動に対し財政的支援を行った。
- ・平成17年度から、学科別入試を廃止し、学部一括募集を行うこととし、そのために、学生に各学科の学習に関心をもたせる導入科目の配置及び学生の体系的かつ効

果的な学習に貢献する4年間の履修モデルの設定等の教育課程の改革を行った。

- ・就職課を設置し、同窓会と連携して就職アドバイザーの配置等就職支援方を具体化した。平成16年度の就職状況は、95.3パーセント(就職希望者に占める就職者の割合、平成17年3月31日現在)であった。

《大学院課程》

- ・商学研究科に、アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)を設置し、教育目的である新規事業を創造し、既存事業の革新を行い、組織改革を実行し得る高度職業人を養成する教育を実施することとした。
- ・商学研究科アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)では、次に掲げる授業形態及び学習指導方法を採用することとした。
 - a 「基本科目」、「ビジネス・プラン」、「ケース・スタディ」、「基礎科目」及び「発展科目」の全授業科目にモジュール型授業(集中連続型)を取り入れるとともに、予習・復習にはeラーニングシステムを導入する。
 - b 全ての専任教員を履修指導教員とし、2年間継続したきめ細かな履修指導を行う。
- ・商学研究科現代商学専攻に、地域文化の担い手となる人材を育成するために、一般教育系及び言語センターの多様な学問資源を最大限に活かしたカリキュラム、「統計学」、「企業活動と地球環境保全」、「食料・水問題と国際協力」の科目を設置し、また、言語センター教員による英語関連科目(「異文化交渉論」、「異文化コミュニケーション」、「ビジネス英語」、「ビジネス英語の意味論」、「広告英語」)を充実させ、英語専修免許の課程を設置した。
- ・商学研究科現代商学専攻において正・副指導教員制度を維持し、きめ細かな論文作成指導を行った。

(2) 研究面での取り組み

- ・(株)北洋銀行からの寄附講座を受け入れ、学内に「北洋銀行企業再生寄附研究部門」を設置し、2年間同銀行の調査部担当部長に客員教授の名称を授与した。
- ・北海道東海大学地域連携研究センターと本学のビジネス創造センターの間で共同研究等の協力を行うことで合意した。
- ・ビジネス創造センターにおいて、ビジネス相談、インタラクティブ・ビジネス・ワークショップ、高度技術研修会等の社会連携事業を行った。
- ・大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)において、職業人を対象としたエグゼクティブ・プログラム「MBA サマーセミナー」を開催した。

法人化のメリットを活用し、大学運営の活性化などを目指した、財政、組織、人事などの面での特色ある取り組み

- ・学長が大学全体の戦略的見地から「予算編成方針」を策定し、その方針に基づき予算編成するとともに、大学総予算における全ての事業経費は、各事業実施部門からの申請を予算編成方針により査定・配分する方法により実施した。
- ・学長裁量経費(学長裁量経費95,996千円、学長政策経費10,000千円)のうち、95,996千円について「教育研究改革改善プロジェクト経費」及び「教育研究基盤設備充実経費」を設け、学内から62件の申請があり、学長が査定し、41件に配分する部門別予算要求に競争原理が働く仕組みにより実施した。
- ・業務内容と適切に対応した事務系職員の学内・外の研修プログラムの整備し、語学研修及び実務研修を経験させる「事務系職員海外派遣研修(平成16年度1名派遣)、本学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻の専門職学位課程を履修させる「事務系職員ビジネススクール派遣研修」、文部科学省における実務を経験させる「事務系職員文部科学省派遣研修」の各プログラムを実施し、新国立大学協会との連携においては、「大学マネジメントセミナー」、「国立大学法人等新任部長研修」、「国立大学法人等新任課長・事務長研修」を受講させた。
- ・法人化にあたり、学長が行う大学運営の企画等に対応するため企画・評価室を設置

した。就職支援強化のため就職課を設置し、同窓会の支援による就職アドバイザーを配置し、平成16年度就職状況は、95.3パーセント（就職希望者に占める就職者の割合、平成17年3月31日現在）であった。入試広報体制の強化のため入学主幹を入試課を改組した。国際企画課に語学（英語）のスペシャリスト（係長、専門職）を採用した。また、会計課を財務課に組織換えし財務処理円滑に進める職員配置を行った。

- ・学長が行う戦略の立案、事業等の企画について、学長が必要と認める場合は、その都度、学長補佐を配置し、その提言に基づき適切に処理することとした。平成16年度は、施設設備担当の学長補佐を配置し、学内施設の有効利用について調査を行い、専門職大学院アントレプレナーシップ専攻小樽キャンパス及び学部・大学院の教育開発を担う教育開発センターを、講義棟に配置した。
- ・業務部門とは別に学長直属の組織として「経営監査室」を設置するとともに、経営監査室関連の規程を制定し、調査・勧告権限を付与した。
- ・社会連携の強化として、学長の「小樽商工会議所」、「札幌商工会議所」、「中小企業家同友会」に加入し、本学が地域商工業の発展に積極的に関わるとともに、インターンシップ事業、産学連携、受託研究等の展開を進めることとした。
- ・教員の年齢構成、人件費総額の推移見込等を分析した上で、教員の採用上限数、学長裁量人数（2名）、採用保留人数、大学全体枠等を示した「学内教員定員管理の基本的枠組み」を策定し、教員採用を学長の下に一元管理することとした。
- ・施設貸付範囲の緩和による利用を拡大するため、申請があった場合は原則貸し付ける旨明文化して利用者制限を緩和し、明快な料金設定を実施した。
- ・教員の年齢構成、人件費総額の推移見込等を分析した上で、教員の採用上限数、学長裁量人数（2名）、採用保留人数、大学全体枠等を示した当面の「学内教員定員管理の基本的枠組み」を策定し、教員採用を学長の下に一元管理することとした。
- ・事業収入額について、インセンティブ配分する仕組みを構築し、平成16年度は、大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻エグゼクティブ・プログラムの「MBAサマーセミナー」に適用した。この事業の収益115万円の一部58万円をアントレプレナーシップ専攻に還元した。
- ・（株）北洋銀行へ寄附研究部門を提案し、協定を締結した。平成17年4月からビジネス創造センターの下に「北洋銀行企業再生寄附研究部門」を設置し、北洋銀行から同寄附研究部門の客員教授を受け入れた。
- ・広報委員会規程を整備し、委員の中に学外有識者委員1名を加え、学内委員8名の計9名の構成とし、積極的な広報活動が行える体制を整備した。広報紙作成等において外部からの有効な意見により先進な委員会活動となっている。学外委員からは、情報発信は地域住民への浸透度、内容の評価及び費用対効果について評価軸を設定して確認する必要がある等貴重な提言をいただいている。
- ・市民参加による一日教授会を学外で実施した。平成16年度は、「言わせてもらおう、街から見た商大」と題し、市民と本学との交流、学生との交流を主な目的として開催した。高大連携で本学の夜間主コースの授業を体験受講している高校生、本学公開講座を受講している主婦、市内の企業経営者、そして市民とのイベント交流を行ってきた本学学生からのゲストスピーチの後、市民との意見交換を行った。
- ・志願者数確保のための大学説明会（オープンユニバーシティ）（札幌194人、旭川22人、函館20人の参加）、及び本学での大学説明会（オープンキャンパス）（午前は模擬授業で734名、午後は570名の参加）出前講義は12高校で行い、高校訪問は北海道・東北・中京地区52校、進学説明会は出版社及び高校主催で北海道・東京・仙台・名古屋等の各地区で22回開催した。
- ・事務処理全般のIT化方針により、会議開催通知及び議事要旨をペーパーレス化し経費抑制を図った。
- ・利用拡大を図るため、本学独自の判断で貸付が出来るよう財産管理規程等の利用規程を改訂・整備した。また、使用料についても規程整備時に改訂して利用拡大が図られるようにした。

3. 事務所等の所在地

北海道小樽市

4. 資本金の状況

3,692,763,193円(全額 政府出資)

5. 役員の状況

役員の定数は、国立大学法人法第10条により、学長1人、理事3人、監事2人。任期は国立大学法人法第15条の規定及び国立大学法人小樽商科大学組織・運営規程の定めるところによる。

役職	氏名	就任年月日	主な経歴
学長	秋山 義昭	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	平成14年4月 学長
理事	山本眞樹夫	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	平成14年4月副学長
理事	和田 健夫	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	平成13年4月副学長
理事	佐々木喜四	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	札幌市役所総務局長
監事	土橋 信男	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	北星学園大学学長
監事	西田 豊彦	平成16年4月1日 ~平成18年3月31日	公認会計士

6. 職員の状況(平成16年5月1日現在の現員)

教員 128人 職員 71人

7. 学部等の構成

商学部
商学研究科

8. 学生の状況(平成16年5月1日現在の在職者)

総学生数 2,648人
学部学生 2,556人
修士課程 54人
専門職学位課程 38人

9. 設立の根拠となる法律名

国立大学法人法

10. 主務大臣

文部科学大臣

11. 沿革

小樽商科大学は、昭和24年5月国立学校設置法（法律第150号）により、新制大学として発足し、平成16年4月国立大学法人小樽商科大学移行し、今日に至っている。

その起源は、遠く明治44年5月全国の官立高等商業学校のうち第5番目として開校された小樽高等商業学校の設立にはじまる。以来、今日に至るまでに、本学の歴史は実に93年の永きにわたっており、産業の興隆並びに学術・文化の発展に貢献してきた。

12. 経営協議会・教育研究評議会

経営協議会（国立大学法人の経営に関する重要事項を審議する機関）

氏名	現職
秋山 義昭	学長
山本 眞樹夫	理事
佐々木喜四	理事
遠藤 薫	商学部経済学科教授
奥田 和重	大学院商学研究科アントルプレナティブ専攻教授
逢坂 誠二	ニセコ町長
小原 芳春	(社)小樽商科大学緑丘会理事長
鎌田 力	小樽信用金庫会長
作田 和幸	(株)北海道新聞社顧問
榊原 清則	慶應義塾大学総合政策学部教授

教育研究評議会（国立大学法人の教育研究に関する重要事項を審議する機関）

氏名	現職
秋山 義昭	学長
山本 眞樹夫	理事
和田 健夫	理事
渡邊 和夫	附属図書館長
君羅 久則	言語センター長
下川 哲央	ビジネス創造センター長
持田 泰昭	情報処理センター長
江口 修	国際交流センター長
遠藤 薫	商学部経済学科長
伊藤 一	商学部商学科長
石黒 匡人	商学部企業法学科長
行方 常幸	商学部社会情報学科長
久保田 顕二	商学部一般教育系学科主任
大矢 繁夫	商学研究科現代商学専攻長
松本 康一郎	商学研究科アントルプレナティブ専攻長
中村 秀雄	商学研究科アントルプレナティブ専攻 教授
篠塚 友一	商学部経済学科 教授
小田 福男	商学部商学科 教授
結城 洋一郎	商学部企業法学科 教授
小笠原 春彦	商学部社会情報学科 教授
荻野 富士夫	商学部一般教育系 教授
高井 収	言語センター 教授

「事業の実施状況」

・大学の教育研究との質の向上

1. 教育に関する実施状況

(1) 教育の成果に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 本学における教育方法の研究・開発,教材研究開発,授業評価法の開発等ファカルティ・ディベロップメント及び教育課程の編成等に関する検討を行うため,教育開発センターを設置する。 「知の基礎」系の科目の運用実績を調査し,その位置付け,内容及び運用について再検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に教育開発センターを設置し,センターの組織を学部・大学院教育開発部門とアントレプレナーシップ教育開発部門に分け,さらにその下に,専門的事業を遂行するFD専門部会,インターンシップ専門部会,教育支援経費専門部会を置いた。 教務委員会に,学問への導入,基本的な知識,大学で学ぶための技法を修得する授業科目である知の基礎系科目の見直しと運用の改善を検討するための「知の基礎系WG」を設置し,その位置づけや科目構成,運用方法等について審議した結果, <ul style="list-style-type: none"> 接続教育としての知の基礎系の位置づけ。 科目の見直し。 教育開発センターによる授業計画の策定。 を内容とする成案を得,平成17年度に学則を改正することとした。 学長裁量経費を受けて,学生や院生のプレゼンテーション,ディベート,ブレインストーミング,問題発見等に係わる教育の研究の一環として「商大メソッド・セミナー」を開催した。放送ディレクター,弁護士,新聞記者,研究者を講師に迎え,本学学生,教員を対象に,現代社会におけるコミュニケーション力,表現力の重要性,改善について講演会を行った。延べ300名の学生がゼミナール単位で参加した。
<p>シラバス・オリエンテーション等を通じて,学生に教養教育の重要性を認識させ,基礎科目,外国語科目等について幅広い履修を促す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 新入生オリエンテーションにおいて,教養教育の重要性及び教育課程全般にわたる説明を行った。 なお,シラバスの見直しを行い,授業目標の明確化,オフィスワーカーの記載の徹底等記載内容の充実を図った。
<p>交換留学,外国人留学生の受入等を通じた国際交流を促進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度外国人留学生の受入れは88名である。 交換留学における受入学生は28名,派遣学生は21名である。 語学留学における派遣学生は25名である。 北海道経済連合会主催の「道内留学生との視察&意見交換会」に参加した。 市内の小中学校の「総合的な学習の時間」に留学生との交流を実施した。
<p>教育課程及び教育方法に関する年度計画の実施を通じて人材育成のための環境の充実に努める。</p>	<p>(2) 教育内容等に関する実施状況の年度計画の「平成17年度入試から実施する学部一括募集に対応するため,現在のカリキュラムの見直しを行う」から「FD講演会やFDコラム,シラバスなどを通じて単位制・履修登録上制限の意義を周知するとともに,単位制を実質化する講義法について検討する。」までの「計画の進行状況等」を参照。</p>
<p>本学出身の中学・高校教諭の研究会(教職研究会)に,教員を目指す現役学生を参加させる。</p>	<p>本学の教員,本学を卒業し教職に就いた卒業生,在学生で教職を目指す学生による研究会「教職研究会」を平成16年12月に開催した。在学生15名が参加し,全体では当日参加も含めると約70名となり,教育現場の勤務実態,教員の採用状況に関しての意見交換が行われた。</p>
<p>交換留学,外国人留学生の受入等を通じた教育の国際交流を実施する。</p>	<p>平成16年4月にウェスタンミシガン大学と本学の双方の学生により,「P & G ジャパン(アメリカ巨大企業が日本市場で成功した事例)」ほか,4つのテーマを掲げ,4班に班分けし,ケーススタディ・プレゼンテーションを実施した。</p>
<p>学生に対する就職支援を強化する。</p>	<p>平成16年4月に就職課を設置し,就職アドバイザーの配置,就職支援室の設置,就職相談日の設定,就職情報の提供,就職ガイダンス・セミナーの充実等を図った。</p>
<p>地域社会における学生の</p>	<p>平成16年9月に本学厚生補導業務の一環として,学長,副学長,</p>

<p>課外活動を支援する方策を検討する。</p>	<p>事務局長と教務委員会、学生委員会、国際交流委員会等々を所掌する教職員で構成され、32名の教職員を集めて開催した「教職員学生指導研究会」において課外活動支援策を協議した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生委員会において、対象プロジェクトの採択件数、1件当たりの支援金額（現物援助）、応募方法等具体的な支援策を検討し、本学の学生、大学院生の個人又はグループが企画・運営・実施するプロジェクトに援助する「小樽商科大学プロジェクト」要領を作成した。
<ul style="list-style-type: none"> 学部での成績優秀な学生が3年で卒業し、大学院で専門的な研究ができる制度（学部・大学院5年間一貫教育制度）を導入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 早期卒業制度（3年間で卒業）及び大学院（修士課程又は専門職学位課程、2年間）を組み合わせさせたシステムとして「学部・大学院（修士課程及び専門職学位課程）5年一貫教育プログラム」を作成し、本学大学院の両専攻に進学することを可能とした。
<ul style="list-style-type: none"> 商学研究科に、新たにアントレプレナーシップ専攻（ビジネス・スクール）を設置し、従来の専攻（「経営管理専攻」から「現代商学専攻」に名称変更）と合わせ2専攻とし、アントレプレナーシップ専攻では高度職業人養成を、現代商学専攻では研究型大学院教育をめざし、役割分担をはかる。具体的には、それぞれ以下の教育目的を持たせる。 <p>《アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）》</p> <ul style="list-style-type: none"> 新規事業を創造し、既存事業の革新を行い、組織改革を実行しうる人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に大学院商学研究科に、専門職学位課程としてアントレプレナーシップ専攻を開設、38名が入学し、新規事業を創造し、既存事業の革新を行い、組織改革を実行しうる人材を育成するという、教育目的をシラバス等で周知して実施している。
<p>《アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）》</p> <ul style="list-style-type: none"> 組織変革のできる自治体職員を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に大学院商学研究科に、専門職学位課程としてアントレプレナーシップ専攻を開設し、北海道庁、千歳市役所等の職員4名が入学し、組織変革のできる自治体職員を育成するという、教育目的をシラバス等で周知し実施している。
<p>《現代商学専攻》</p> <ul style="list-style-type: none"> 他大学大学院博士課程に進学する人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科修士課程現代商学専攻において、「経済学コース」、「商学コース」、「企業法学コース」、「応用社会情報コース」において、博士後期課程に進学を希望する学生に対して「履修モデル」を作成し、シラバスで学生に周知し、意欲を持つ人材の育成を図っている。
<p>《現代商学専攻》</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域文化の担い手となる人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科修士課程現代商学専攻において、一般教育系、言語センターなど本学の多様な学問資源を最大限に活かしたカリキュラムを検討し、「統計学」、「企業活動と地球環境保全」、「食料・水問題と国際協力」の科目を設置した。 なお、言語センター教員による英語関連科目を充実させ、英語専修免許の課程を設置した。
<ul style="list-style-type: none"> アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）において、学生による「授業評価法」、教員自身による「自 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻において、前期に学生による「授業評価アンケート」、教員の相互評価を行う「授業参観シート」及び自己評価のための「教育活動実施記録シート」を作成した。 各期終了までに学生による「授業評価アンケート」と教員相互に

<p>己評価法」, 同僚教員による「相互評価法」を検討し確定する。 各学期修了までにこれらの評価を実施して, 教育評価を行う。</p>	<p>よる「授業参観」を実施し, これらの結果をもとに, 「授業評価アンケートの分析結果について」と題して, 前期と後期併せて2回FD研修会を実施した。</p>
---	--

(2) 教育内容等に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 入試広報・高大連携の平成16年度事業計画を策定し, 実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験委員会入試広報・高大連携専門部会を4月に開催し, 平成16年度事業計画を策定した。これに従って, 札幌・旭川・函館において大学説明会(オープンユニバーシティ), 大学を開放して行う進学説明会であるオープンキャンパス, 高校に出向く出前講義, 本学紹介のための高校訪問(進学説明会等)を実施した。 大学説明会(オープンユニバーシティ)に, 札幌では194名, 旭川22名, 函館20名が参加し, オープンキャンパスには, 模擬授業(午前)で734名, 大学説明会(午後)では570名が参加した。また, 出前講義は12高校で行い, 高校訪問は北海道・東北・中京地区52高校, 進学説明会は出版社及び高校主催で道内, 東京, 仙台, 名古屋等で22回開催した。
<ul style="list-style-type: none"> これまでの入試広報・高大連携を総括し, 問題点・課題を明らかにして今後の方向性について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験委員会入試広報・高大連携専門部会で検討の結果, 高大連携事業の総括に関する報告書を作成し, 改善を図っていくことを決定し, 報告書原案を作成した。平成17年度に報告書原案を検討し, 最終報告書をまとめることとなった。
<ul style="list-style-type: none"> これまでの入学者選抜方法研究を総括し, 今後の調査研究の方向性について検討する。 平成16年度入試の選抜結果の分析及び成績調査を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験委員会入学者選抜方法研究専門部会で, これまでの本学の入学試験の変遷, 一般選抜の受験者の併願大学状況調を調査事項として追加することとした。 平成16年度入試の選抜結果については, データを分析し, 平成14年度入学者の3年間の成績調査と併せて平成17年度に報告することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 社会人及び留学生に対する入試広報のあり方について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験委員会入試広報・高大連携専門部会で, 留学生については, 中国語のホームページの作成, 日本語学校へのPR, 社会人については, ホームページの充実, 社会人向けの公開講座と連携した広報活動を, 平成17年度から実施することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 留学生のために日本における就職先の増加に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 札幌商工会議所主催の「道内企業と中国人留学生との交流会」へ就職内定に繋がるよう, 中国人留学生を参加させ, 一般学生と同様に就職支援を行い, 前年度は卒業生7名のうち1名が就職, 平成16年度は卒業年次生21名のうち7名が就職した。
<ul style="list-style-type: none"> 入試業務と入試広報・高大連携を統括する入試課を設置する。 入学試験委員会のもとに, 入学者選抜に関わる業務を専門的に行う組織を設置し, 事務職員を参加させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に入試課を設置するとともに, 入試・広報担当専門員を配置した。 入学試験委員会のもとに, 5つの専門部会(調査書・志望理由書専門部会, 合格者判定資料作成専門部会, 入学者選抜方法研究専門部会, 入試広報・高大連携専門部会, 入試電算処理専門部会)を設置した。そのうち, 入試広報・高大連携専門部会, 入試電算処理専門部会には構成員として入試課長が参画し, 事務の意見等が汲み取れるようにした。
<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度入試から実施する学部一括募集に対応するため, 現在のカリキュラムの見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度から学部一括募集(平成16年度入試までは各学科毎に学生を募集。夜間主コースでは平成15年度入試から一括募集を実施している。)を行うことに伴い, それに対応するため, 「昼間コース入試一括募集にともなう教育課程検討のためのWG」を設置し, 1年次の教育課程の見直しを行い, 専門4学科の1年次における教育課程として, 学科導入科目(各学科の情動的・導入的科目),

	<p>専門的学習のための科目（各学科における最も基礎的な科目）を配置し、学科所属決定方法及び学科変更制度を導入した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 「知の基礎」系科目の運用実績を調査し、その位置付け、内容及び運用について再検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教務委員会に、学問への導入、基本的な知識、大学で学ぶための技法を修得する授業科目である知の基礎系科目の見直しと運用の改善を検討するための「知の基礎系WG」を設置し、その位置づけや科目構成、運用方法等について審議した結果、 <ul style="list-style-type: none"> 接続教育としての知の基礎系の位置づけ。 科目の見直し。 教育開発センターによる授業計画の策定。 <p>を内容とする成案を得、平成17年度に学則を改正することとした。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 夜間主コースにおいて、働きながら学ぶ学生、生涯教育を目指す学生のために履修モデル及び開講計画を提示する。昼間コースにおいては、各学科の専門教育を基礎に、関連する科目を結合した履修モデルを検討する。 シラバスに本学の教育目的、教育課程の特徴、教育方法等を明示し、学生の効果的な履修計画を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 夜間主コースは履修モデルを作成し開講計画とともに平成16年度のシラバスに掲載した。 昼間コースは教育開発センターに設置された「昼間コース入試一括募集にともなう教育課程検討のためのWG」での検討内容をもとに教務委員会で審議し、経済学科、商学科、企業法学科及び社会情報学科の履修モデルを平成17年度のシラバスから掲載することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 夜間主コースの学生定員を100名から50名に削減し、働きながら学ぶ学生及び社会人の再教育・生涯教育のためのコースと位置付け、教育課程においては、所属学科を超えて自由に学習できる「総合コース」とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月1日付けで、所属学科を超えて自由に科目選択ができる総合コースを設置し、次の内容で学則の改正を行った。 <ul style="list-style-type: none"> 夜間主コースの入学定員を100名から50名に削減。 夜間主コースの教育課程の見直し。 卒業所要単位数の所属学科の単位習得条件を撤廃。
<ul style="list-style-type: none"> 学部での成績優秀な学生が3年で卒業し、大学院で専門的な研究ができる制度（学部・大学院5年間一貫教育制度）を導入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 早期卒業制度（3年間で卒業）及び大学院（修士課程又は専門職学位課程、2年間）を組み合わせたシステムとして「学部・大学院（修士課程及び専門職学位課程）5年一貫教育プログラム」を作成し、本学大学院の両専攻に進学することを可能とした。
<ul style="list-style-type: none"> インターンシップ事業の拡大・促進を図る。 インターンシップの研修プログラムモデルを開発する インターンシップの受入企業の増加に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学独自のインターンシップ・プログラムの拡大に加えて、本学以外の企業等が行うインターンシップの修了を本学におけるインターンシップの履修とみなすこととし、必要な事項について検討し、原案を作成した。 前年度のインターンシップ内容を分析し、いくつかの研修パターンを作成した。 受入企業については、36社から41社に増加し、受入学生は67名から81名に増加した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学同窓会との連携のもとに、平成16年度の「エバグリーン講座（総合科目）」を企画立案する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学同窓会との連携のもとに、様々な分野で活躍している12名の本学卒業生を講師に迎えて、「エバグリーン講座（総合科目、2単位）」と称し実施している。平成16年度は250名の授業履修者があった。毎授業終了時にレポートを課し、本学教員が採点して、授業担当の同窓生に返却している。
<ul style="list-style-type: none"> 英語の授業を基礎クラス、発展クラス、ネイティ 	<ul style="list-style-type: none"> 昼間コース英語 A, Bとも発展、基礎、標準のクラスを複数設け、夜間主コースでは、英語 A, Bを基礎と標準クラスに分

<p>ブクラスに分けて行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 留学生が参加する授業について検討する。 学生の海外留学、語学研修を積極的に推進し、高度な国際理解力の涵養を図る。 	<p>けた。英語 Bにも基礎クラスを設けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 短期留学プログラムの学生が外国語の授業に参加し、practicum(日本語科目)の単位として認定する制度を実施した。また、TA(ティーチングアシスタント)として留学生(大学院生)を授業の教育補助に活用している。 短期語学研修の募集に際しては、語系ごとに担当者を定めて、相談、面接等を行っているほか、個別の相談にも対応した。 新入生に対してのテキストとして「外国語への招待」を作成し、国際交流の有用性を周知した。
<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度入試から実施する学部一括募集に対応するため、現在の教育課程の見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度から学部一括募集(平成16年度入試までは各学科毎に学生を募集。夜間主コースでは平成15年度入試から一括募集を実施している。)を行うことを決定した。それに対応するため、教育開発センターに「昼間コース入試一括募集にともなう教育課程検討のためのWG」を設置し、1年次の教育課程の見直しを行い、専門4学科の1年次における教育課程として、学科導入科目(各学科の情動的・導入的科目)、専門的学習のための科目(各学科における最も基礎的な科目)を配置し、学科所属決定方法及び学科変更制度を導入した。
<ul style="list-style-type: none"> 授業時間割作成段階において、講義科目の時間割配置を工夫し、特定の科目に履修者が偏らないよう配慮し、大人数講義の削減に努める。 「知の基礎」系科目の運用実績を調査し、その位置付け、内容及び運用について再検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教務委員会に「時間割作成WG」を設置し、時間割案を作成して、受講者が多い科目は同時間割り枠、複数クラスで開講する等の検討を行った。 教務委員会に、学問への導入、基本的な知識、大学で学ぶための技法を修得する授業科目である知の基礎系科目の見直しと運用の改善を検討するための「知の基礎系教務WG」を設置し、その位置づけや科目構成、運用方法等について審議した結果、 <ul style="list-style-type: none"> 接続教育としての知の基礎系の位置づけ。 科目の見直し。 教育開発センターによる授業計画の策定。 を内容とする成案を得、平成17年度に学則を改正することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 基礎ゼミナールの教育目的、方法論、運営方法について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教務委員会に設置した「知の基礎系WG」での検討の結果、特定のテーマのもと少人数(15名程度)による教育で、文献の読み方、レポートの書き方・報告の仕方を学ぶ基礎ゼミナールを、 <ul style="list-style-type: none"> 大学の学習に必要な知的技法の習得。 教員と学生の交流を通じた大学生活への適応。 を目的とする科目ととらえ、教育方法、運営方法を定めて学内に周知した。 さらに、基礎ゼミナールの目的をシラバスに記載し、新入生オリエンテーションにおいても説明し、履修を促すこととした。
<ul style="list-style-type: none"> 学生と協力し、プレゼミ等による研究指導に関する情報提供、オリエンテーションの充実を図る。 ゼミナール大会の支援等を通じ、ゼミナール相互の交流を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生団体であるゼミナール協議会と連携して、ゼミナール紹介本を作成・配付し、オリエンテーションの充実を図った。 学長裁量経費で「ゼミナール活動支援プログラム」を策定し、優れた効果が期待し得るゼミナールでの活動計画として選定されたものに対して、11件、77万円の支援を行った。さらに、学内広報誌でゼミナール相互の交流を推進した。 学長裁量経費を受けて、学生や院生のプレゼンテーション、ディベート、ブレインストーミング、問題発見等に係わる教育の研究の一環として、「商大メソッド・セミナー」を開催した。放送ディレクター、弁護士、新聞記者、研究者を講師に迎え、現代社会におけるコミュニケーション力、表現力の重要性について講演会を4回行った。延べ300名の学生がゼミナール単位で参加した。
<ul style="list-style-type: none"> 履修指導教員制度の充実を図る。 (4) 学生への支援に 	<ul style="list-style-type: none"> 履修指導教員実施要項を改正し、履修指導教員を28名に増やし、一般教育、言語センター教員による履修指導も可能とする等、制度の充実を図った。

<p>関する実施状況の年度計画の「履修指導教員の人数を12名から28名に増員する。」から「履修相談日(学科相談日:月1回等)等を設け、履修指導教員を中心に履修相談を行う体制について検討する。」を参照</p>	
<ul style="list-style-type: none"> 4単位科目の半期開講制の実施、科目の2単位化等、全ての科目について半期開講を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 4単位科目の半期開講を平成17年度授業計画において実施できなかった科目について、各学科からその理由を聞き、教務委員会で問題点を検討することとなった。
<ul style="list-style-type: none"> シラバス等に記載する項目(履修モデルの提示、履修指導、教員制度等)の検討及び内容の精査を行う。 各授業科目のオリエンテーションを実施し、学生に対する詳しい授業内容の事前周知に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 夜間主コースについては、履修モデルを作成し開講計画とともに平成16年度のシラバス及びホームページに掲載した。 昼間コースについては、教育開発センターに設置された「学部一括募集にともなう教育課程検討のためのWG」での検討内容案をもとに、教務委員会で審議し、経済学科、商学科、企業法学科及び社会情報学科の履修モデルを決定し、平成17年度のシラバスから掲載することとした。 履修指導教員制度をシラバスに掲載した。 その他の記載項目は、記載内容の徹底化を図るとともに、シラバスで書き切れない授業の情報については、第1回目の講義時に周知した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学ホームページにシラバスを掲載する。 シラバスのCD-ROM化等電子情報化を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページにシラバスを掲載した。 学生生活実態調査でパソコンを使用しない学生が1割以上もいることが明らかになったため、CD-ROMによる配布は見送って、ホームページ等を有効活用することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 授業改善のためのアンケートを実施し、その結果を分析し、授業改善の方策を検討して公表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 非常勤講師が担当する科目を含め、ほぼ全科目を対象に学生による授業改善のためのアンケートを実施した。 その結果についての分析を行い、授業改善の方策を検討し、本学のFD活動報告書である「ヘルメスの翼に(第2集)」に掲載し、公表した。
<ul style="list-style-type: none"> 授業担当教員に対し講義用機器に関するアンケート等を行い、授業に必要なマルチメディア関係機器を必要に応じて段階的に整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全授業担当教員にアンケートを実施し、マルチメディア関係機器、OHPを貸出方式にする等必要な改善を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 言語センター、情報処理センターに関する学生への情報提供・広報活動を段階的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 高校生を対象とした大学説明会を機に、言語センターの広報のためのパンフレットを作成し、マルチメディアライブラリに設置した。広報のための掲示板を事務室前に設置したほか、言語センターのHPの内容の充実を図った。 情報処理センターでは、新入生を対象に「センター利用の手引き」をテキストとしてガイダンスを実施した。新入生の利用登録は、ほぼ全員となった。
<ul style="list-style-type: none"> FD講演会やFDコラム、シラバスなどを通じて単位制・履修登録上限制の意義を周知するとともに、単位制を実質化する講義法について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 4月に実施した新入生オリエンテーション及びシラバス、学園生活の手びきにおいて単位制及び履修登録上限制の趣旨を周知した。 単位制を実質化する講義法として、e-Learningシステムを開発するための費用を概算要求した(認められている)。
<ul style="list-style-type: none"> 成績評価基準の過度のばらつきを是正するための成 	<ul style="list-style-type: none"> FD専門部会において、FD研究の一環として、成績評価基準の策定、運用の方針について検討を進め、ワークショップ(教員によ

<p>績評価基準の策定、運用等の方針について検討する。</p>	<p>る研修会)を開催して意見交換を実施した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> より客観的で厳密な評価を与えるため、現4段階である成績評価の細分化を進め、GPA制度の導入について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> FD専門部会において、FD研究の一環として、現4段階である成績評価の細分化とGPA制度の導入について検討し、ワークショップ(教員による研修会)を開催して意見交換を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> アントレプレナーシップ専攻と現代商学専攻の2専攻について、以下の入学者選抜方法を検討及び実施する。 <p>《アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)》</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会人選抜においては意欲、目的を、一般選抜においては目的、学力を重視した選抜方法を実施する。 企業等派遣・企業等推薦による入学者選抜方法を検討する。 夜間大学院であるため、外国人の在留資格「留学」が認められるように地元自治体と協力して構造改革特区の申請を行う。 <p>《現代商学専攻》</p> <ul style="list-style-type: none"> 学力及び意欲を重視する選抜方法を実施する。 	<p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会人には、小論文・口頭試験を、また一般学生には学力試験・面接試験をそれぞれに課すとともに、配点のバランスを考慮した入試を実施した。 平成18年度入試からの企業等派遣・企業等推薦実施に向け、入学試験委員会で地方公共団体と意見交換を行った。 夜間大学院であるため、外国人の在留資格「留学」が認められるように札幌市及び小樽市を通じて構造改革特別区域の申請を行い、認定された。 <p>【大学院商学研究科修士課程現代商学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一般学力試験選抜において、本学卒業又は卒業見込みで学業成績優秀者に対して行う学力検査を免除する特別選抜を、商学コース及び応用社会情報コースに加え、経済学コースでも実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 両専攻において、TOEFL、TOEIC、経済学検定試験等の外部試験と学内作成試験を併用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻及び修士課程現代商学専攻において、学力試験に、TOEFL、TOEIC、経済学検定試験の外部試験を導入した。
<ul style="list-style-type: none"> 入試業務と入試広報を統括する入試課を設置する。 従来の大学院入試広報を全面的に見直し、2専攻体制の基での効果的な入試広報のあり方について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に入試課を設置した。 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻及び修士課程現代商学専攻の大学院説明会の同時開催、本学ホームページや広報誌への掲載に努め、かつ、アントレプレナーシップ専攻では、東京及び道内主要都市で説明会を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 就職支援活動や産学官連携活動等、企業等と連携する様々な機会を捉えて、大学院のアドミッション・ポリシーや教育内容の広報に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学の同窓会である小樽商科大学緑丘会に依頼し、卒業者に本学大学院を紹介する葉書を発送した。特に大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻については、企業等に対して、アントレプレナーシップ専攻説明会、北海道庁との連携で開催する赤れんがフォーラム等、大学院のアドミッション・ポリシーや教育内容の広報活動を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> アントレプレナーシップ専攻と現代商学専攻の2専攻において、以下の教育課程を実施する。 <p>《アントレプレナーシップ専攻(ビジネススクール)》</p> <ul style="list-style-type: none"> MBAの学位を授与する 	<p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「基本科目」、「基礎科目」、「発展科目」、「実践科目」、「リサーチ・ワークショップ」と基礎から応用へと積み上げ式に知識・スキルを習得できるよう、体系的かつ積み上げ方式の教育課程を編成した。 <p>【大学院商学研究科修士課程現代商学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「経済学コース」、「商学コース」、「企業法学コース」、「応用社会

<p>ため、体系的かつ積み上げ方式の教育課程を編成する。</p> <p>《現代商学専攻》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「経済学コース」、「商学コース」、「企業法学コース」、「応用社会情報コース」を置き、学部における専門4学科の教育との接続した教育課程とする。 ・ 一般教育系教員などの学問的資源を有効に活用したカリキュラムを作成・実施し、研究型大学院としての特色を維持する。 ・ 言語センター教員による英語関連科目を充実させ、英語専修免許の課程認定を受けるための検討を行う。 	<p>情報コース」を置き、学部における専門4学科（経済学科，商学科，企業法学科，社会情報学科）の教育と接続した教育課程とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の多様なニーズに応える研究型大学院としての特色を維持するために、一般教育系教員などの学問的資源を有効に活用したカリキュラムとすべく新たに、「統計学」、「企業活動と地球環境保全」、「食料・水問題と国際協力」等の授業科目を設置した。 ・ 商学研究のグローバル化に対応した英語重視の教育課程とするため、言語センター教員による英語関連科目を充実させ、英語専修免許を取得するため、文部科学省から課程認定を受けた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ アントレプレナーシップ専攻と現代商学専攻の2専攻において、以下の授業形態及び学習指導方法を採用する。 <p>《アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本科目をはじめとする全ての授業科目で、モジュール型授業（集中連続型）を取り入れるとともに、予習・復習にはeラーニングシステムを導入する。 ・ 全ての専任教員を履修指導教員とし、2年間継続した、きめ細かな履修指導を行う。 ・ インターンシップの研修プログラムを開発する。 <p>《現代商学専攻》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 正・副研究指導教員制を継続し、きめ細かな研究指導を行う。 ・ 学生のニーズに沿った履修モデルを作成する。 	<p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成16年度開講科目全てにモジュール型授業（集中連続型）を導入した。予習復習にe-Learningシステムを導入した。 ・ 全ての専任教員を履修指導教員とし、学生に対し、履修相談期間を設けて履修指導をするほか、履修指導のために教員同士の中間ヒアリングを実施した。 ・ 教育開発センターのインターンシップ専門部会の下にインターンシップ・タスクフォースを設置し、研修プログラムを検討し、開発した。 <p>【大学院商学研究科修士課程現代商学専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 従来の正・副研究指導教員制を継続し、修士論文中間報告会を行う等きめ細かな指導に努めている。 ・ 英語専修免許取得希望者に沿った、英語専修免許の課程認定のための国際商学コースの履修モデルを作成した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 秀・優・良・可・不可の5段階評価を新たに取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻及び修士課程現代商学専攻教務委員会において検討し、秀・優・良・可・不可の5段階評価を新たに取り入れ、実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 優秀者に対する表彰及び奨学金給付制度の具体案について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 奨学金制度については、道内国立大学学生指導担当副学長・学生関係部課長会議において承合事項とし、資料を収集した。 <p>大学院成績優秀者に対する表彰基準申合せについて、大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻及び修士課程現代商学専攻の教務委員会に検討を依頼したが、成績以外の客観的な基準を定めるのが困難なため、引き続き検討することとなった。</p>

(3) 教育の実施体制等に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 学務関連事務等処理するため札幌サテライトに、専任職員1名と非常勤職員1名を配置する。 	<ul style="list-style-type: none"> 札幌サテライトに、平成16年4月から専任職員1名と非常勤職員1名を配置した。
<ul style="list-style-type: none"> 採用手続・位置付けを含むTAのあり方について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科修士課程現代商学専攻において、「TAの円滑な実施のための提案」を策定し、これに従って教務委員会が、TA（ティーチングアシスタント）の採用方法等を決定した。
<ul style="list-style-type: none"> 講義用機器マニュアルを拡充・整備する。 授業担当教員に対し講義用機器の希望に関するアンケート等を通じて授業に必要なマルチメディア関係機器の整備について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全教員に配付している「講義用機器マニュアル」を拡充・整備を行った。 授業担当教員に対し導入してほしい講義用機器などの要望に関するアンケート等を実施し、授業に必要なマルチメディア関係機器の整備を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 情報ネットワークや情報サービス機器等を活用した授業に関する実態調査を行い、授業を実施する際の課題、問題点を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> (3)教育の実施体制等に関する実施状況の年度計画の「授業等による講義室からのネットワーク利用状況等について調査する。」から「学内におけるネットワーク利用状況等について分析する。」までの「計画の進行状況等」を参照。
<ul style="list-style-type: none"> ゼミ室における物品の調査・点検を実施し、老朽化物品の更新・整備を必要に応じて行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ゼミナール（基礎ゼミを含む）担当教員にアンケートを実施し、91ゼミ室中63ゼミ室のパソコンを更新する等の必要な改善を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 貴重古資料を中心とした未入力図書7千冊の目録所在情報の電子化遡及入力を行う。 西洋古典の経済学書を中心に貴重資料約8千頁を電子化し、インターネット上に公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 貴重古資料を中心とした未入力図書約9,500冊の目録所在情報の電子化遡及入力を行った。 貴重資料約3,400頁の電子化を行ったが、インターネット上の公開については、検討した結果、電子化がある程度纏まった段階で行うことになった。
<ul style="list-style-type: none"> 学生用図書、参考図書のより一層の充実を図るため、予算確保を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生用図書及び参考図書予算について、前年度予算を上まわる予算配分額を確保し、参考図書の充実を図った。
<ul style="list-style-type: none"> 地域住民を含めた図書館利用者のために日曜開館を試行するとともに、休業期間（夜間主コース夏学期）における開館時間の延長を本実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月より日曜開館（試行）を開始した。約3,000名の利用者があり、一日平均約75名が利用した。その結果、平成17年度から日曜開館を本格実施することとした。 通常夜間開館時間を10時に延長し、休業期間（夜間主コース夏学期）における夜間開館時間を1時間延長した。
<ul style="list-style-type: none"> 図書館利用に関する講習会の実施及び図書館ホームページの更新を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度図書館利用に関する講習会であるライブラリーツアーを、前期・後期に分け延べ23回実施した。 図書館ホームページは、4月以降順次更新した。
<ul style="list-style-type: none"> 高齢者等の図書館利用に配慮し、階段への手摺りの設置及び利用の多様性に配慮したトイレの改修を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 2階利用者用女子トイレ個所の洋式化改修を施設営繕により実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 学外者が誰でも自由に閲 	<ul style="list-style-type: none"> 図書館の利用を申し出た学外者は誰でも自由に閲覧できるサービ

<p>覧できる利用サービス体制に改め、利用について地域への広報活動を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 貴重図書の見学会及び講演会を実施する。 	<p>ス体制を実施した。</p> <p>小樽市の広報誌である「広報おたる」及び報道機関を通じて、図書館利用の広報活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 貴重図書の展示会（1回）と併せて図書館講演会「小樽高商と図書館」を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業等による講義室からのネットワーク利用状況等について調査する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員を対象として、ネットワーク利用状況調査を実施した。要望の中には、無線LANの接続利用を望む声が多かった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ インターネットの利用状況について分析（SINETとの関係）する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員、学生を対象に、インターネットの利用状況調査を実施した。調査により、バックアップ体制が不十分であることや、高速化が必要ことが判明したため、民間プロバイダとの接続形態を検討することとなった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ E-Learning システムの基本構築を行う。Webサーバを設置する。 ・ 作成した教材の登録・参照機能を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院用 e-Learning サーバを設置し、専門職大学院（アントレプレナーシップ）の授業に導入した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学内におけるネットワーク利用状況等について分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員、学生を対象に、ネットワーク利用状況調査を実施した。分析した結果、 <ul style="list-style-type: none"> ・ 用途は、情報検索、情報収集が主である。 ・ スパムメール、ウイルスメールが日常の研究に支障を来していることが明らかになった。 平成17年度に情報セキュリティポリシーを検討することとした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業改善のためのアンケートを実施し、その結果を分析し、授業改善の方策を検討して公表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 非常勤講師が担当する科目を含め、ほぼ全科目を対象に学生による授業改善のためのアンケートを実施した。 その結果の分析を行い、授業改善の方策を検討し、本学のFD活動報告書である「ヘルメスの翼に（第2集）」に掲載し、公表した。 <p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前期終了時に学生による「授業評価アンケート」を実施し、授業改善のための方策を検討した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）において <ul style="list-style-type: none"> 学生による「授業評価法」、教員自身による「自己評価法」、同僚教員による「相互評価法」を検討し確定する。 各学期終了までにこれらの評価を実施して教育評価を行う。 	<p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前期に学生による「授業評価アンケート」、教員の相互評価を行う「授業参観シート」及び自己評価のための「教育活動実施記録シート」を作成した。 ・ 学生による「授業評価アンケート」を集計し、個々の教員の教育評価を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 初任者FD研修とFD講演会を1回以上開催する。 ・ アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）では、教育評価結果に基づいて、各学期終了後にFD研修を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初任者FD研修を4月に実施した。 ・ FD講演会は、外部から講師を招いて「教育改善の取り組み」をテーマとして11月に実施し、約30名が参加した。 <p>【大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各期終了までに学生による「授業評価アンケート」と教員相互による「授業参観」を実施し、これらの結果をもとに、「授業評価アンケートの分析結果について」と題して、前期と後期併せて2回FD研修会を実施した。

(4) 学生への支援に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新入生オリエンテーションの他、入学後一定時期を経てからの少人数制のオリエンテーション実施を検討する。 ・ 夜間主コースにおいては、働きながら学ぶ学生、生涯教育を目指す学生のために、履修モデル及び開講計画を提示する。昼間コースにおいては、各学科の専門教育を基礎に、関連する科目を結合した履修モデルを検討する。 ・ 履修モデルについては、シラバス及びホームページに掲載し、オリエンテーションと併せて、学生への周知徹底を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成17年度から、後期授業開始時に、学科説明と履修モデルの説明を中心にした少人数のオリエンテーションを実施することとした。 ・ 夜間主コースは履修モデルを作成し、開講計画とともにシラバス及びホームページに掲載した。平成17年度から、少人数オリエンテーションで履修モデルの説明を行うこととした。 ・ 昼間コースについては、教育開発センターに設置された「昼間コース入試一括募集にともなう教育課程検討のためのWG」において検討された内容をもとに教務委員会で決定し、平成17年度からシラバス等で学生に提示することとした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修指導教員の人数を12名から28名に増員する。 ・ 履修指導教員が、履修指導を行いやすくするための「マニュアル」について検討する。 ・ 1年次・2年次の成績不良者に対し、年2回(4月、10月)履修指導・相談を行う。 ・ 履修相談日(学科相談日:月1回等)等を設け、履修指導教員を中心に履修相談を行う体制について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修指導教員制実施要項を改正し、履修指導教員の人数を12名から28名に増員した。 ・ 履修指導教員のための、履修に関する基本的事項について記載する、履修指導マニュアルを作成することで検討を行った。 ・ 成績不良者に対して、1年次生には4月と10月に、2年次生には4月に履修指導教員が履修指導を行った。 ・ 継続的な履修指導のあり方について教務委員会で審議し、引き続き検討することとなった。学長、副学長、事務局長と教務委員会、学生委員会、国際交流委員会等々を所掌する教職員で構成する「教職員学生指導研究会」(9月開催)において、履修指導のあり方について協議を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修指導関係のホームページを立ち上げ、各学科の履修モデルや履修指導教員のオフィスアワー等を掲載する。 ・ 学生の質問に対する回答をデータとして蓄積し、ホームページのQ&Aとして掲載する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修指導関係のホームページを立ち上げ、各学科の履修モデルや履修指導教員のオフィスアワー等を掲載した。 ・ 学生が質問し大学が回答するホームページ(Q&A方式)を立ち上げ、今後学生との質問等、内容を充実することとした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生生活実態調査の項目や実施方法等について検討し、調査を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生生活実態調査専門委員会において調査項目、実施方法等について検討し、10月に学部学生(昼間コース、夜間主コース)に対し、調査を実施した。 その結果を分析し、「学生生活に関する調査報告書」として原案を作成した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生生活支援のためのセミナーや講演会(メンタルヘルス・エイズ・マルチ商 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生委員会において、学外講師を迎え実施する各種セミナーについて検討し、平成17年度から「学生生活支援セミナー」として、メンタルヘルス及びマルチ商法対策の講演会、交通マナー及び救急

<p>法対策等の各種講演会、交通マナー・防犯・救急救命の各種講習会、避妊・性感染症の教育セミナー等）の実施計画を策定する。</p>	<p>救命の講習会を開催することとなった。</p>
<p>・ 保健管理センター業務の充実を図るため、下記事項について、検討する。 a 健康診断受診率の向上及び健康診断時の健康・病歴調査方法等について b 個別指導及びミニ健康ゼミナールの実施について c ホームページの健康情報などの充実、他機関や他大学との保健活動上の交流推進について</p>	<p>・ ホームページ及び掲示で日程を学生に周知し、健康診断受信率の向上を図った。健康診断時に「学生健康調査票」と聞き取りにより健康・病歴調査を行った。 個別指導、ミニ健康ゼミナールは次のとおり実施した。 健康教室「SEXについて考えてみませんか？」 禁煙講演会「いまから止められるタバコ」 「喫煙を防止するパネル展」 アルコールパッチテスト 体脂肪測定 ・ ホームページの充実については、「パニック障害って何？」、「うつ病ってどんな病気？」の健康情報を掲載し、また、「北海道地区大学保健管理業務職員研修会」、「全国大学保健管理研究集会」等諸会議に出席し、保健活動上の情報交換等を行った。</p>
<p>・ 学生団体（自治会、体育会、音楽芸術団体等）との連携を図り、支援体制の方策について検討する。</p>	<p>・ 毎月1回、「教育担当副学長と学生代表との懇談会」を開催し、サークルが利用できる共用室確保、大学祭における物品等の援助、合宿研修施設の壁の塗り替え等、その都度、可能な支援策を講じた。</p>
<p>・ 就職支援とインターンシップを総括する就職課を設置する。 ・ 同窓会と協力し就職支援を強化する。 ・ 学生委員会のもとに、事務職員も参加する就職支援のための専門部会を設ける。</p>	<p>・ 平成16年4月に就職課を設置した。 ・ 本学の同窓会である小樽商科大学緑丘会と共同して、卒業者名簿の整備及び就職アドバイザーの配置を行った。 就職活動のアドバイス等相談体制を整備し、学生に対する就職活動費の融資制度について検討した。 ・ 平成16年4月に事務職員も構成員とする「就職対策専門部会」を設置した。</p>
<p>・ 経済的支援制度について調査研究を行う。</p>	<p>・ 奨学金制度については、「道内国立大学学生指導担当副学長・学生関係部課長会議」において承合事項とし、資料を収集した。 学生委員会において経済的支援に関する調査結果が報告され、更に調査を進めることにした。</p>
<p>・ 独自の奨学金制度の導入について調査研究を行う。</p>	<p>・ 奨学金制度については、「道内国立大学学生指導担当副学長・学生関係部課長会議」において承合事項とし、資料を収集した。 学生委員会において奨学金の導入について、検討を開始した。</p>
<p>・ 地域住民を含めた図書館利用者のために日曜開館を試行するとともに、休業期間（夜間主コース夏学期）における開館時間の延長を本実施する。</p>	<p>・ 平成16年4月より日曜開館（試行）を開始した。約3,000名の利用者があり、一日平均約75名が利用した。その結果、平成17年度から日曜開館を本格実施することとした。 ・ 通常夜間開館時間の延長（1時間延長）及び休業期間（夜間主コース夏学期）における夜間開館時間の延長（1時間延長）を本実施した。</p>
<p>・ 国際交流ラウンジに関する留学生等のニーズ調査を行う。</p>	<p>・ 国際交流ラウンジに関するアンケート調査を実施した。その結果に基づき改善可能な事項（以下のとおり）から実施した。 ・ 情報交換用として掲示板、ホワイトボードの設置。 ・ 各種情報誌等を並べる大型マガジンラックの設置。</p>
<p>・ 託児所設置に関するアンケート調査を行い、実施の可能性について検討する。</p>	<p>・ 教職員及び学生に対し託児所に関するアンケートを行い、その結果を基に、実施の方策等について検討した。</p>

2. 研究に関する実施状況

(1) 研究水準及び研究の成果に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 外部研究資金獲得のためのシステムについて検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 寄附講座等を受け入れるために「寄附講座・寄附研究部門規程」及び「寄附講座等教員選考に関する申合せ」等の規程を整備した。(株)北洋銀行との間で「北洋銀行企業再生寄附研究部門」の協定を締結した。 総務担当副学長を中心に学科長等を構成員とした「科学研究費補助金WG」を設置し、組織的に申請件数等の増加に取り組んだ。その結果、申請件数が26件から54件に増加した。その後、「科学研究費補助金WG」を「外部資金獲得WG」と改称し、外部資金獲得の方策について検討し、今後具体化していくこととなった。併せて、本学の産学連携に対する姿勢と意欲を示した「国立大学法人小樽商科大学産学官連携ポリシー」を策定した。
<ul style="list-style-type: none"> 在外研究のための学内予算措置を講ずる。 学内における各種研究会に対する支援策について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員の国際的研究活動を支援するため、在外研究に必要な経費について、平成16年度新たに学内予算枠を確保し、教員の申請に基づき配分した。 学内の各研究会について、平成16年度は、特に本学における学術成果を広く社会に還元する活動を実施しているビジネス創造センターが支援する研究会に対し財政的支援を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 小樽商科大学・北海道地域連携協議会(本学、北海道、札幌市、小樽市で構成)を基盤に具体的プロジェクトを協議・決定し、各年度実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「第2回小樽商科大学・北海道地域連携協議会」を平成16年6月に開催し、組織の経営を多面的・全般的に観察する目を養うことを目的とした「小樽商科大学MBAサマーセミナー」の開催を決定し、同セミナーを平成16年8月に実施した。 小樽まち育て運営協議会より「外国人観光客に対するホスピタリティ人材の育成」事業委託の依頼があり、受託事業として受入れを行った。
<ul style="list-style-type: none"> 学外各種委員会等への参加を「対外的な研究活動」と位置付け、研究活動の評価対象とすべく、検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学評価委員会に「研究評価専門部会」及び「評価項目・フィードバック専門部会」を設置し、研究評価の在り方について、合同で検討した。その結果、学外各種委員会等への参加を対外的な研究活動として位置付け、「外部各種審議会・委員会等への参画」という研究評価の項目の1つとして評価することとなった。
<ul style="list-style-type: none"> 語学及びテーマ別の公開講座を開催する。 夜間主コースの講義を、社会人のための再教育・生涯教育の場として積極的に位置付け、公開講座として社会人に開放する。 	<ul style="list-style-type: none"> 語学の公開講座を次のとおり開催した。 <ul style="list-style-type: none"> 前期:「外国人による集中英会話」(受講者23名),「外国人による集中中国語会話」(受講者9名),「外国人による集中ロシア語会話」(受講者7名),「外国語としての日本語とその教授法」(受講者12名)。 後期:「外国人による集中英会話」(受講者12名)。 なお、後期において、実施についての要望が高かった「外国人による集中韓国語講座」(受講者13名)を開催した。 夜間主コースの授業を、社会人のための再教育・生涯学習の場として積極的に位置づけ、通常の授業に参加する形の「通常授業公開講座」として、社会人に開放した。その結果、30科目に60名が受講した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学の研究活動を、個々の教員及び全体について自己点検・外部評価するための体制を検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学評価委員会に自己評価・外部評価を専門に実施する組織として、「研究評価専門部会」及び「評価項目・フィードバック専門部会」を設置し、研究評価の在り方について、「本学が行う研究評価のあり方」として以下の論点を合同で検討し、作成した。 <ul style="list-style-type: none"> 評価目的の明確化 国立大学法人評価・機関別認証評価及び外部評価への対応 研究目的・目標と評価項目 個人別研究活動業績調書 評価に必要なデータ・資料の収集・管理

(2) 研究実施体制等の整備に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 研究費配分システムについて検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 財務委員会において、研究活動にインセンティブ効果があるものに対して、研究費配分方法について検討し、教員研究費の一部を科学研究費補助金の申請・採択状況、論文発表数、受賞歴等の活動状況を踏まえて配分する仕組みを構築し、実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 外部研究資金獲得のためのシステムについて検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 寄附講座等を受け入れるために「寄附講座・寄附研究部門規程」及び「寄附講座等教員選考に関する申合せ」等の規程を整備した。(株)北洋銀行との間で「北洋銀行企業再生寄附研究部門」の協定を締結した。 総務担当副学長を中心に学科長等を構成員とした「科学研究費補助金WG」を設置し、組織的に申請件数等の増加に取り組んだ。その結果、申請件数が26件から54件に増加した。その後、「科学研究費補助金WG」を「外部資金獲得WG」と改称し、外部資金獲得の方策について検討し、今後具体化していくこととなった。併せて、本学の産学連携に対する姿勢と意欲を示した「国立大学法人小樽商科大学産学官連携ポリシー」を策定した。
<ul style="list-style-type: none"> 研究に必要な設備等の整備のための予算配分の方針について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度は学長裁量経費により、研究に必要な基盤の設備等を整備することとし、特に研究用図書やデータベース等の整備について、重点的に配分することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 理系、知財分野等を中心に学外協力スタッフを補強する。 学外協力スタッフと協力して、今後の起業支援に関する方針策定と体制整備を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 理系(医)及び知財分野で各1名、大学発V B支援(株式公開及び財務等)で3名の計5名を増員し、従前から併せて計17名の学外協力スタッフを得た。 平成17年2月に、ビジネス創造センタースタッフも参加する学外協力スタッフ会議を開催し、起業支援の方針等を協議した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学の研究活動を、個々の教員及び全体について自己点検・外部評価するための体制を検討し、成案を得る。 本学の研究活動を、個々の教員及び全体について自己点検・外部評価するための体制を検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学評価委員会に自己評価・外部評価を専門に実施する組織として、「研究評価専門部会」及び「評価項目・フィードバック専門部会」を設置し、研究評価の在り方について、「本学が行う研究評価のあり方」として以下の論点を合同で検討し、作成した。 <ul style="list-style-type: none"> 評価目的の明確化 国立大学法人評価・機関別認証評価及び外部評価への対応 研究目的・目標と評価項目 個人別研究活動業績調書 評価に必要なデータ・資料の収集・管理
<ul style="list-style-type: none"> 道内大学との共同研究体制について、調査・研究を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 道内の他大学との共同研究体制についての調査を行い、検討の結果、北海道東海大学地域連携研究センターと本学ビジネス創造センターにおいて共同研究等の協力を行うことで合意した。
<ul style="list-style-type: none"> 他大学の研究者との交流促進のための、予算措置を含む支援方法について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国立大学法人3大学及び私立1大学との間で、研究者交流促進のための予算措置を含む支援方法の策定について、情報交換・協議を行った。

3. その他の実施状況

(1) 社会との連携、国際交流等に関する実施状況

年度計画	計画の進行状況等
<ul style="list-style-type: none"> 共同研究等の拡大に向けた広報、地域ニーズ調査、実施体制の整備等を行う。 地域密着型共同研究等の実施件数につき、前年度以 	<ul style="list-style-type: none"> 共同研究等の拡大に向けた広報として、 <ul style="list-style-type: none"> ビジネス創造センター(CBC)パンフレットの刷新 ビジネス創造センター(CBC)研究活動報告書の刊行 ニューズレターの刊行 HPによる各種イベントの紹介

<p>上を確保することを目標とする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果報告会の開催（外部者も参加可能）を実施した。 ・ 小樽商工会議所の協力を得て、共同研究に対するニーズ調査を実施中である。 ビジネス創造センター（CBC）専任教員の採用により実施体制の充実を図った。 ・ 地域密着型共同研究等の相談・打診はあったが、企業側の都合等で契約に至らないものもあり、契約実績は2件になった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネス創造センター登録研究会の活動を評価し、可能な限り地域に開放するように促すとともに、市民参加型の研究会を中期計画期間中、新たに5研究会を立ち上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民参加型の登録研究会を1件新規発足させた（スモールビジネス・マーケティング研究会：SBM研究会）。 既存の登録研究会の市民解放化について状況調査した。調査結果を踏まえ可能なものから開放化に取り組むこととした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域社会活性化へのニーズを汲み上げるため、「一日教授会」を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民との交流をテーマにして「一日教授会」を3月に学外で開催し、地域社会からのニーズを積極的に汲み取った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 語学及びテーマ別の公開講座を開催する。 ・ 夜間主コースの講義を、社会人のための再教育・生涯教育の場として位置づけ、公開講座として社会人に開放する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 語学の公開講座を次のとおり開催した。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 前期：「外国人による集中英会話」（受講者23名）、「外国人による集中中国語会話」（受講者9名）、「外国人による集中ロシア語会話」（受講者7名）、「外国語としての日本語とその教授法」（受講者12名） ・ 後期：「外国人による集中英会話」（受講者12名） ・ なお、後期において、実施についての要望が高かった「外国人による集中韓国語講座」（受講者13名）を開催した。 ・ 夜間主コースの授業を、社会人のための再教育・生涯学習の場として積極的に位置づけ、通常の授業に参加する形の「通常授業公開講座」として、社会人に開放した。その結果、30科目に60名が受講した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者データベース化に着手して一元的かつ積極的に本学教員を派遣する学内体制の整備を検討する。 ・ 学外各種委員会等への参加を「対外的な研究活動」と位置づけ、研究活動の評価とすべく、検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者データベース化のために、2003年版研究者総覧のデータを基に、事務レベルでの更新と新規採用者のデータの収集・整備を行った。 ・ 地域貢献推進委員会において、本学教員を一元的かつ積極的に派遣する体制を整備するため、教員個別の社会貢献可能な事項についてデータの収集方法や広報戦略の在り方についての検討を行った。 ・ 大学評価委員会において、教員の行政機関等への学外各種委員会等への参加を「対外的な研究活動」として位置付け、「外部各種審議会・委員会等への参画」という研究評価の項目の一つとして位置づけた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネス創造センター登録研究会、専門職大学院等との連携を含めて「ビジネス相談」により専門的・組織的に対応する体制の整備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネス創造センター（CBC）及び専門職大学院アントレプレナーシップ専攻の専任教員の連携による「ビジネス相談」体制を発足させた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ セミナー、ワークショップ開催のための調査及び体制の整備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ セミナー、ワークショップ開催のための調査及び体制の整備を行い「インタラクティブ・ビジネス・ワークショップ（IBW）」を平成17年3月に開催した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネス創造センターニュースレターを年2回発行し、ビジネス創造センター研究成果報告会を年1回開 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ビジネス創造センターニュースレター」を年間2回発行し、ビジネス創造センター（CBC）研究成果報告会を平成17年2月に札幌で開催した。

<p>催する。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> これまで開催してきた「高度技術研修」の成果を生かし、実践的・機能的なセミナーを開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践的・機能的なセミナーである「高度技術研修会」を平成17年2月に開催した。
<ul style="list-style-type: none"> これまで蓄積してきた大学発ベンチャー企業創出のノウハウを集約・整理し、論文等で公表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学発ベンチャーマニュアル「創設から廃止まで」(文部科学省委託)を文部科学省に成果として提出し、公表した。
<ul style="list-style-type: none"> ビジネス創造センターのビジネス相談での対応の他、テーマによっては、共同研究等での掘り下げ支援及び実践的なエグゼクティブコースの開催支援のための調査と体制の整備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 経済産業省より要請の全道拠点都市・MOTプログラム「北海道地域MOTシンポジウム(同省主催、本学ビジネススクール・室蘭工大・北見工大・帯広畜産大学など共催)」に本学から3名の教員が4回出講した。 エグゼクティブコースの開催支援のため体制をホームページに掲載し、札幌商工会議所主催の第二創業セミナー及び信用金庫主催の若手経営者塾へ講師等を派遣した。
<ul style="list-style-type: none"> 理系、知財分野等を中心に学外協力スタッフを補強する。 学外協力スタッフとビジネス創造センタースタッフ教員等との情報・意見交換会を年1回開催し、活動の強化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 理系(医)及び知財分野で各1名、大学初VB支援(株式公開及び財務等)で3名の計5名を増員し、従前から併せて計17名の学外協力スタッフを得た。 平成17年2月に、ビジネス創造センター(CBC)スタッフも参加する学外協力スタッフ会議を開催し、活動の強化の方針等を協議した。
<ul style="list-style-type: none"> 道内の公私立大学(理系を主)を対象に、大学発ベンチャー創出等に関する知見を広める場を作る方法を調査・研究する。 	<ul style="list-style-type: none"> 道内の他大学に対して、大学発ベンチャー創出等に関する意見交換会実施についての調査を行い、検討の結果、北海道東海大学地域連携研究センターとの間で意見交換会を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 協定締結可能なカナダの大学の調査(現地調査を含む。)を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> カナダにおいて、Carleton University 他3校を現地調査し、協定締結可能な大学を1校選定した。
<ul style="list-style-type: none"> 現行組織の問題点等の洗い出しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際企画課に一般公募により語学力の高い職員を2名採用し、学内異動でも語学力に優れた職員を重点配置した 国際交流委員会において、正式な構成員に国際交流副センター長、国際企画課長及び大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻から委員を加える等委員会体制を強化した。
<ul style="list-style-type: none"> 先行実施大学の実態調査を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 先行大学である東京工業大学、一橋大学、東京農工大学の調査を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 帰国外国人留学生の連絡先、進路等を調査・データベース化し、フォローアップ体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰国外国人留学生に関する連絡先等の調査を実施した。その調査結果をデータとして整理・保存し、活用できる体制を整備した。
<ul style="list-style-type: none"> 協定締結校を持たないアジアの開発途上国の大学の調査(現地調査を含む。)を行う 	<ul style="list-style-type: none"> アジアでの協定締結校を選定するために現地調査を実施する予定のところ、アジアでの政治情勢及び自然災害等により調査が不可能となり断念せざるえない状況となったので、次年度に再調査を行うことを決定した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学における国際開発協力の基本方針を検討し、成案を得る。 協力可能分野等のデータベース化に着手する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際企画課を中心に以下の項目を内容とする国際開発協力の基本方針(国際開発協力に関するコンサルティングに関して)を検討した。 <ul style="list-style-type: none"> 個人ベースの活動から大学よる組織的な活動への転換。 学内の教職員に国際開発協力活動を理解・認知してもらうため

	<p>の活動強化。 本学の「研究者総覧」を基本として、国際開発協力可能な分野等もつ教員を抽出し、分野等の整理を行った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 本学における国際開発協力の基本方針を検討し、成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際企画課を中心に以下の項目を内容とする国際開発協力の基本方針（国際援助機関等に対する提案に関して）を検討した。 <ul style="list-style-type: none"> 先行大学の調査。 国際協力支援機関（JICA、JBIC等）の事業調査。
<ul style="list-style-type: none"> 本学における国際開発協力の基本方針を検討し、成案を得る。 協力可能分野等のデータベース化に着手する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際企画課を中心に以下の項目を内容とする国際開発協力の基本方針（国際援助機関等に対応する大学側の窓口に関して）を検討した。 <ul style="list-style-type: none"> 事務組織として、国際企画課が窓口となる。 全学を取り込んだ横断型の組織の構築を図ることとなった。 本学の「研究者総覧」を基本として、国際開発協力可能な分野等もつ教員を抽出し、分野等の整理を行った。

・業務運営の改善及び効率化

1. 運営体制の改善に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 本学全体の見地から、学長が行う企画及び立案に際して、学長を補佐するため、学長が指名する者数名を「学長補佐」として配置する。 		<ul style="list-style-type: none"> 「学長補佐規程」を制定し、施設設備担当の学長補佐を配置した。学長補佐の下で学内施設の有効利用及び調整について調査検討を行い、平成16年度に発足した「教育開発センター」を講義棟に配置した。今後、本学の課題に応じて、その都度学長補佐を配置することに決定した。
<ul style="list-style-type: none"> 各種委員会等の位置付け、業務内容等について検討し、必要があれば見直しを行う。 		<ul style="list-style-type: none"> 委員会の業務内容を見直した結果、「将来構想委員会」、「学科長会議」、「人事委員会」、「大学院研究科委員会」等複数の委員会を整理し、それら委員会の役割・機能を定める「組織・運営規程」を制定した。
<ul style="list-style-type: none"> 各種委員会等の審議を円滑に進めるため、必要に応じて委員会等組織に事務職員を参画させる。 		<ul style="list-style-type: none"> 「大学評価委員会」、「財務委員会」、「目標計画委員会」、「附属図書館運営委員会」等複数の委員会に、事務局長、企画・評価室長、事務長、担当課長を委員として加えた。
<ul style="list-style-type: none"> 運営組織に、幹部職員が有効に加わる体制について検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> 幹部職員を運営組織に加える方策について検討した結果、中期目標・中期計画を専ら担当する目標計画委員会の構成員に、事務局長を加えることとした。
<ul style="list-style-type: none"> 予算原案の検討及び調整等を行う財務委員会を設置し、また、予算管理事務を所掌し予算原案策定を支援する事務組織を整備する。 経営協議会及び役員会等での予算原案の審議手続きを明確化する。 財務委員会の下に、管理会計等専門分野の教員や外部の公認会計士などから成るプロジェクトチームを発足させ、平成16年度予算の編成及び実行に当たっての問題点を把握、検討し、平成17年度以降の新予算管理シ 		<ul style="list-style-type: none"> 理事（委員長）、事務局長、複数教員で構成する「財務委員会」を設置し、予算に関する諸課題等について検討するとともに、予算に関する事務業務を専任で行う事務組織として、財務課内に予算係を整備した。 「予算決算及び出納事務取扱規則」を制定し、経営協議会及び役員会等における予算原案の審議手続きの明確化を図った。 財務委員会の下に「予算計画WG」を設置し、平成16年度予算の編成及び実行上の問題点等を把握・検討した。 その結果を踏まえて、平成17年度においては外部の公認会計士を加えて、最適な予算管理方法等について検討・構築することとした。

<p>ステムの設計を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学長による本学全体の戦略的見地からの予算編成方針の下に、平成16年度予算を編成し実行する。 学長による予算編成方針の立案を支援する体制と審議プロセスを検討する。 各学科系・課等の部門別予算要求に競争原理が働く仕組みを検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> 学長が策定した予算編成方針に基づき平成16年度予算を編成した。 また、予算編成にあたっては、支援組織として財務委員会において審議手続きを検討、「予算決算及び出納事務取扱規則」を制定して経営協議会、役員会での審議手続きにより実施した。 部門別予算要求の仕組みについて、大学総予算における全ての事業経費は、各事業実施部門からの申請に基づき査定・配分する方法により実施した。また、当初予算により措置できなかった事業についても、学長裁量経費に学内共同事業充実経費を設け、申請に基づき学長が査定・配分する方法により実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度の実行予算について、随時、実績との差異を把握し、適切な是正措置をとる。 各学科系・課等の部門別には、効率的な予算執行を可能とするため、予算支出にあたっての責任権限を持たせるとともに、執行責任を委譲することでのコスト感覚の醸成を図る。 目標を超えた収入額を獲得した予算執行部門には、収入見合い額を配分する等のインセンティブを反映させる予算管理システムを検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度当初予算の執行状況について、調査・検証し、予算と実績の差異を平成16年12月の補正予算に反映させた。「会計規程」、「予算決算及び出納事務取扱規則」において、各部門毎の予算の編成・執行に係る責任者を明確に定め、配分予算の執行等に関する責任権限を委譲した。 各学科等が、特定の事業を実施することにより獲得した収入額について、実施主体に対して、インセンティブ配分する仕組みを構築し、平成16年度は大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻が実施した、組織の経営を多面的・全般的に観察する目を養うことを目的とした「MBA サマーセミナー」について適用した。
<ul style="list-style-type: none"> 本学の業務及び財産を把握し、「国立大学法人会計基準」に準拠し、本学の実状に合わせたセグメント、予算決算事項、勘定科目の設定等を行う。 本学「会計規程」、「会計規程運用方針」、「会計システム運用マニュアル」等の諸規定及びマニュアル等を整備し、組織的な会計制度を確立する。 会計業務が適切に実行されるよう内部牽制制度を設け、会計業務手続きの詳細を定める。 		<ul style="list-style-type: none"> 「会計規程」を初めとする会計関係諸規程（実施要項を含む）を制定し、本学の会計制度を確立するとともに、「国立大学法人会計基準」を踏まえ、会計諸規程において本学の勘定科目、予算区分等を設定した。 法人化後の会計処理を適切に行うため、「会計システム運用マニュアル」、「会計処理マニュアル」を作成し、関係職員に配布した。 法人化後の会計業務に対応した財務課内各係担当業務の見直しを行うとともに、内部牽制を確保し得る会計処理における内部牽制プロセスを整備した。
<ul style="list-style-type: none"> 内部監査機能を充実させるため、業務執行部門とは独立した組織を設ける。 		<ul style="list-style-type: none"> 内部監査機能を充実させるために、業務部門とは別に学長直属の組織として「経営監査室」を設置するとともに、経営監査室関連の規程を制定し、調査・勧告権限を付与した。 監事、会計監査人、経営監査室による監査会議を3回開催し、

<ul style="list-style-type: none"> ・ 当該組織は学長直属とし、業務執行部門に対する調査、勧告権限を与える。 ・ 監事及び外部監査人と協力して、内部監査業務のあり方を検討する。 	<p>本学の監査のあり方、監査実施手続き等を協議するとともに、協議結果を踏まえて各役割に応じた監査を行った。</p>
---	--

2. 教育研究組織の見直しに関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学内の各種委員会等の活動を集約し、教育研究組織上の問題点・課題を把握するシステムについて検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 学内主要委員会の年度活動状況について、年度末開催の教育研究評議会で報告し、次年度の委員会活動に資するとともに全学構成員に周知することとした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 夜間主コースの学生定員を100名から50名に削減し、働きながら学ぶ学生及び社会人の再教育・生涯教育のためのコースと位置付け、教育課程においては、所属学科を越えて自由に学習できる「総合コース」とする。 ・ 商業教員養成課程を廃止する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成16年4月1日付けで所属学科を越えて自由に科目選択ができる総合コースを設置し、次の内容で学則の改正を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 夜間主コースの入学定員を100名から50名に削減。 ・ 夜間主コースの教育課程の見直し。 ・ 卒業所要単位数の所属学科の単位習得条件を撤廃。 ・ 商業教員養成課程を廃止。

3. 人事の適正化に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 職務に応じた勤務形態について検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員について、裁量労働制を導入した場合の実施素案を検討した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 媒体に適する外国の学術雑誌を調査・検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 国立大学法人20大学、私立大学6大学に国際公募について調査したところ、外国の学術雑誌で公募を行っている大学はなかった。ただし、学内において照会したところ、公募に適した外国の学術雑誌がある旨回答を得たため、今後、外国雑誌への掲載を行う等促進することとした。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 託児所設置に関するアンケート調査を行い、実施の可能性について検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員及び学生に対し託児所に関するアンケートを行い、その結果を基に、実施の方策等について検討した。

4. 事務等の効率化・合理化に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 採用に関して、北海道7国立大学等による「北海道地区国立大学法人等職員採用実施委員会」及び「同委員会作業部会」において、事務系職員の採用関係業務の共同処理体制を検討し、実施を試みる。 ・ 養成・研修に関して、 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 採用に関して、北海道7国立大学等による「北海道地区国立大学法人等職員採用実施委員会」及び「同委員会作業部会」において、事務系職員の採用関係業務について、北海道大学に「統一採用試験事務室」を設けて共同処理する体制を検討し、平成16年度から実施することとした。 ・ 養成・研修に関して、北海道7国立大学等の担当課長による「北海道地区大学法人等合同研修実施委員会」を設置し、事務系職員の養成・研修プログラムの階層研修を共同実施することについて検討した。 ・ 人事交流に関して、北海道7国立大学等の担当課長による「北

<p>北海道7国立大学等の担当課長による「連絡会(仮称)」を設置し、事務系職員の養成・研修プログラムの共同実施の方策について検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 人事交流に関して、北海道7国立大学等の担当課長による「連絡会(仮称)」を設置し、事務系職員の人事交流のあり方等について検討を行い、共同業務処理のシステム案を作成する。 	<p>北海道地区大学法人等合同研修実施委員会」を設置し、事務系職員の人事交流のあり方等について検討を行い、交流に際して、各大学間相互で出向協定を締結するシステムを構築した。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 北海道地区国公立大学で組織する「北海道進学コンソーシアム」において、名古屋地区において入試広報を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋において道内国公立大学10校による進学説明会を、河合塾名駅校で開催し、約130名の参加を得た。来年度も引き続き名古屋、大阪でも実施することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 外注化に適した業務について、洗い出しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 外注化に適した業務の洗い出しを行い、秘書業務、情報処理業務、環境整備業務は、派遣会社と契約し外注化を行った。今後さらに外注化に適すると思われる業務について組織的に検討することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 課外活動施設及び国際交流会館の維持管理業務の外注化について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 課外活動施設である屋内プールに関する全ての維持管理業務及びその他の課外活動施設の設備(照明器具、暖房器具など)の維持管理業務を外注化した。 国際交流会館の維持管理業務の外注化について、他大学等を調査したが、完全委託には膨大な経費がかかることが判明したため、部分委託等を含めた新たな外部委託方法を検討することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 講義室等のAV機器の定期的メンテナンスの外注化について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> AV機器のメンテナンスの外注化について検討し、必要経費を算出したが、現在の教室整備費相当額が必要となったため、故障の都度修理する現在の方式を維持することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 事務処理のIT化、ペーパーレス化に該当する業務について洗い出しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 事務処理業務全般について、IT化、ペーパーレス化に該当する業務の洗い出しを行い、会議の開催通知、議事要旨等ペーパーレス化を図ることとした。
<ul style="list-style-type: none"> シラバスを本学ホームページに掲載し、科目選択の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページにシラバスを掲載した。
<ul style="list-style-type: none"> 各種証明書発行の自動化について、検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 事務職員で構成された「学務事務電算化推進WG」において検討した。また、業者からシステム設計についてのヒアリングを行った。平成17年度にはテストランを行い、平成18年度に運用を開始することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 法人化に対応した新事務組織を設置し、適切な職員配置を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学の入試広報体制の強化のため人員を1名増加し、入試課を設置した。また、学生の就職活動の支援のために就職課を新設した。既存の国際企画課には、語学(英語)のスペシャリストを採用した。また、会計課を財務課に組織換えした。中期計画達成のため企画・評価室を設置し、法人化にあたり適切な組織及び職員配置を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 国立大学法人の業務内容と適切に対応した職員の学内・外の研修プログ 	<ul style="list-style-type: none"> 本学独自の平成17年度以降の職員研修の柱となる「事務系職員海外派遣研修」、「事務系職員ビジネススクール派遣研修」、「事務系職員文部科学省派遣研修」の研修実施計画を作成した。平

ラムについて、調査・検討する。	成16年度に前倒しで「事務系職員海外派遣研修」に事務職員を1名派遣した。 国大協が行う研修と併せて他大学等が実施している研修についても検討し、大学マネジメントセミナー、に9名、国立大学法人等課長級研修に2名、国立大学法人総合損害保険研修会に2名が参加した。
・ 職員の意欲を向上させるための透明性のある人事システムについて、調査を行う。	・ 道内大学会議における情報収集、他大学の人事担当者への聞き取り、本学に採用された民間企業出身の教員によるレクチャー、冊子・資料により調査を行い、本学の制度設計を進めることとした。

・ 財務内容の改善

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の研究支援を行う事務組織を整備する。 ・ 科学研究費補助金の申請件数、獲得件数や金額について前年度以上を目標に、組織的な取り組みを行う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の研究支援として総務課研究協力係を設置した。 ・ 総務担当副学長の下に「科学研究費補助金WG」を設置して申請率の向上について検討、学内の説明会等の実施により申請率の向上を図り、前年度と比較して採択件数は増加した。その結果、申請件数が26件から54件に増加した。 その後、「科学研究費補助金WG」を「外部資金獲得WG」と改称し、外部資金獲得の方策について検討し、今後具体化していくこととなった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者総覧の内容の充実を図り、ネット等でも広く公開する。 ・ 本学教員の研究、教育、社会貢献等に関する情報のデータベース化に着手する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究者情報データベース化のために、2004年版研究者総覧のデータを基に、事務レベルでの更新と新規採用者のデータの収集・整備を行い、本学ホームページに掲載して広く公開した。 ・ 地域貢献推進委員会において、本学教員を一元的かつ積極的に派遣する体制を整備するため、教員個別の社会貢献可能な事項についてデータの収集方法や広報戦略の在り方についての検討を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室、体育館、プール、緑丘荘等の貸付範囲を大幅に緩和し、妥当な料金設定により利用拡大を図る。 ・ 利用規程の見直しと、サービス充実のための体制整備を行う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 「財産管理規則」において、本学の事業に支障がないと認められる限り、本学の財産を申請に基づき原則貸付ける旨明文化し、利用者制限を緩和した。施設利用料金については、実際の利用人数、光熱水料等を別途加算して料金を徴収する従来の方法を改め、利用者が理解しやすい明瞭な料金設定を行った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 簿記・言語・情報処理等検定試験向け講習会、一般時事解説向け講座などを整理し、運営体制、料金設定、また運営主体への収入還元の仕組み等について検討する。 ・ アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）において、エグゼクティブ・プログラムの開発について検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 講習会、公開講座等を担当する複数の課において、運営体制の一元化等について検討するとともに、特定の事業を実施することにより獲得した収入額について、実施主体に対してインセンティブ配分する仕組みを構築した。 ・ 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻においてエグゼクティブ・プログラムの開発を検討して、組織の経営を多面的・全般的に観察する目を養うことを目的とした「MBAサマーセミナー」として開催した。約115万円の収入を得、その内約58万円を実施主体（アントレプレナーシップ専攻）に還元した。
<ul style="list-style-type: none"> ・ アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）等に寄附講座を設置 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 寄附講座・冠講座等の受入のための寄附講座・寄附研究部門規程を制定し、寄附講座等客員研究員選考方法に関する申し合わせ等、関係諸制度の整備を行った。

<p>するための関係諸制度の整備を行うとともに、具体的な講座を提案するなど、企業等に積極的な働きかけを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）、ビジネス創造センターに特定目的資金等の寄付を受け入れられるよう努力するとともに、寄付者名や寄付企業等を付し、特典を提供できるいわゆる冠基金・冠講座の設置を可能とするような関係諸制度の整備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> （株）北洋銀行へ寄附研究部門を提案し、協定を締結した。平成17年4月からビジネス創造センターの下に「北洋銀行企業再生寄附研究部門」を設置し、北洋銀行から同寄附研究部門の客員教授を受け入れることとした。
<ul style="list-style-type: none"> 非正規生の増加を図るため、ホームページ、各種説明会、一日教授会等を通じて積極的な広報活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究生・科目等履修生等の非正規生の増加を図るため、本学ホームページにおいて出願要項等を掲載するとともに、市民が参加する一日教授会等での広報活動等を通じて、学外に広く周知を行った。

2. 経費の抑制に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 現状の構内環境整備等で委託している人材派遣業務を、費用対効果の点から再検討する。 適材適所に必要不可欠な業務に限って外部委託を導入する。 		<ul style="list-style-type: none"> プール維持管理、草刈り、屋根の雪下ろし、芝生刈り込み等の構内環境整備業務について、従来は業者業務委託契約と人材派遣契約を併用して実施していたが、人材派遣契約に一元化することにより、経費の抑制を図った。（従来方法と比べて、年間約50万円、15%の抑制）また、秘書業務について、非常勤職員の雇用から人材派遣契約に変更することにより経費の抑制を図った。（従来方法と比べて年間約70万円、17%の抑制）
<ul style="list-style-type: none"> 使用エネルギーの実態調査分析を行う。 省エネシステムへの更新を検討する。 電力小売りの自由化にあたって、電力供給契約の競争契約導入について検討する。 学生・教職員へ省エネ・省資源の啓蒙活動を行う。 光熱水量を1%削減する。 		<ul style="list-style-type: none"> 光熱水量の実態調査及び過去データの分析を行い、それを踏まえ省エネ項目をリストアップし省エネシステムの更新について検討を行った。特に電力については、電力小売りの自由化の関連資料を調査・収集し競争契約の導入について検討した。 学生・教職員に対し学内広報誌等を通じて、省エネ・省資源の啓蒙活動を実施し、併せて省エネ機器の設置や省エネシステムへの更新により、光熱水量を前年度比1%の削減を行った。

3. 資産の運用管理の改善に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 建物等の利用用途に合わせた有効利用化を図る。 宿舎について全体の入居状況を随時把握し、適 		<ul style="list-style-type: none"> 施設設備担当学長補佐による施設の点検を行い、施設の有効利用及び調整について検討し、平成16年度に発足した「教育開発センター」を講義棟に配置することとした。 宿舎の入居状況を把握し、適宜入居者の公募を行い、空き宿舎が生じない対策を講じた。

<p>正な入居調整を行い、空き宿舎が生じない等の方法を講じる。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> ゼミ室、共通室等に保有する電子計算機、実験器具、計測器等の物品について、可能な限り共同利用を図るための調査を行う。 資産価値を高めるため適切な維持保全を行い、できるだけ施設の延命化を図る。 		<ul style="list-style-type: none"> ゼミ室等に保有しているパソコンの実態調査を行い、共同利用についての検討を行うとともに、更新の際に返納となったパソコンについて、学内外に利用希望を照会するなど設備の有効利用を図るための取組みを行った。 施設を長期的に利用するため、普段からの適切な維持・管理を目標とする建物単位の維持管理原案を作成して施設保全を図れるようにした。
<ul style="list-style-type: none"> 大学として施設を整備する際の基本的なコンセプトを策定する。 快適空間のための環境整備を図る。 		<ul style="list-style-type: none"> 大学施設の整備を行う際の基本的なコンセプトとして、キャンパス整備に関する基本的目標と実現のための基本方針を定めた「キャンパスマスタープラン」を策定した。 「キャンパスマスタープラン」に沿って、学内の環境整備について検討し、大学会館前広場を整備し、階段ベンチ、手摺りを設置した。
<ul style="list-style-type: none"> 開放できる施設とそれに備わっている設備の調査をデータベース化する。 利用規程の見直しと、サービス充実のための体制整備を行う。 		<ul style="list-style-type: none"> 講義棟、体育館等について開放可能な設備を調査し、開放可能時間、利用単価等についてのデータの収集を行った。 利用者が利用し易いように受付窓口を整備してサービスの向上を図った。
<ul style="list-style-type: none"> 施設の要修繕箇所調査のマニュアルを作成して、調査を実施する。 		<ul style="list-style-type: none"> 要修繕箇所調査マニュアルを作成し調査を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 施設の劣化を防止するため、効果的に修繕する計画について検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> 施設の劣化防止に向けた既存施設の改修・修繕の年次計画を作成するため、施設の劣化防止計画（案）を検討した。
<ul style="list-style-type: none"> 教育、研究、福利施設等の施設別に費用対効果を考慮した施設の機能水準を作成する。 		<ul style="list-style-type: none"> 現状の施設・設備・環境等の維持管理や新たな施設整備を行うための施設水準を策定した。
<ul style="list-style-type: none"> 広く利用者から聴取した意見を系統別に整理する。 		<ul style="list-style-type: none"> 営繕工事要求についての学内照会、平成16年度に実施した学生生活実態調査等を通じて施設に関する意見を集計し、系統別に整理した。

・自己点検・評価及び情報の提供

1. 評価の充実に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 自己点検評価項目の選定等について検討部会を設置し、部会案を作成する。 		<ul style="list-style-type: none"> 大学評価委員会の下に、「評価項目・フィードバック専門部会」を設け、自己点検評価の基本となる評価項目を検討し、教育研究に関する評価項目を中心とした「自己点検・評価の評価事項及び評価項目」を作成し、教育研究評議会で承認を受けた。 「自己点検・評価の評価事項及び評価項目」に従った自己点検評価の実施に向け、大学評価実施規程の一部改正を行った。
<ul style="list-style-type: none"> フィードバック・システムについて検討部会を設置し、部会案を作成する。 		<ul style="list-style-type: none"> 大学評価委員会の下に、「評価項目・フィードバック専門部会」を設け、教育研究・業務等の自己点検評価の結果に対して表面化した改善点について「改善計画」を立案し、その計画に基づいて実施された改善結果等を大学評価委員会に報告するフィー

		ドバックシステムを構築した。 また、このシステムを有効に利用するために大学評価実施規程の一部改正を行った。
--	--	--

2. 情報公開等の推進に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 大学情報の積極的な公開・提供及び広報に関する基本的な広報戦略を策定する学外者を含めた広報委員会を設置する。 広報戦略を具体的に実施するための広報担当部門を設置する。 		<ul style="list-style-type: none"> 大学情報の積極的な公開及び提供等をするために広報委員会規程の一部改正を行い、委員会委員を学外有識者委員1名及び学内委員8名の計9名とし積極的な広報活動ができる体制を整備した。 積極的な広報活動をするための戦略を立案する体制として、広報委員会委員及び各課広報担当係が参加し、総務課広報文書係を核とする全学的な広報担当部門を設置した。
<ul style="list-style-type: none"> 広報誌、ホームページ、データベース検索等の様々な広報媒体に対する社会のニーズを把握するための調査を検討する。 		<ul style="list-style-type: none"> 広報担当部門において、データベース構築を検討する大学評価委員会と連絡調整を行い、ニーズ調査の原案を作成した。

・その他業務運営に関する重要事項

1. 施設設備の整備・活用に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）における小樽キャンパスの授業は、4号館講義棟2階フロアを整備して行い、札幌での授業は現在の札幌サテライトで実施する。 		<ul style="list-style-type: none"> 大学院商学研究科専門職学位課程アントレプレナーシップ専攻（ビジネススクール）における小樽キャンパスの授業は4号館講義棟2階フロアを整備して使用し、札幌での授業は札幌サテライトで実施することとし、平成16年度から実行した。
<ul style="list-style-type: none"> 施設の老朽化の改善や耐震性能の向上を図るとともに、地域貢献のための交流事業拡大を推進するため、平成17年度概算要求を行う。 		<ul style="list-style-type: none"> 健康科学系施設等の老朽施設の改善を図るため、体育館の改築要求を平成17年度概算要求において行い、平成16年度補正予算において措置された。
<ul style="list-style-type: none"> 学生・教職員へ省エネ・省資源の啓蒙活動を行う。 		<ul style="list-style-type: none"> 学内広報誌、HP、課長・室長・事務長会等により省エネ・省資源の啓蒙活動を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 有効利用に関する規程を制定する。 施設の有効利用を図っている他の事例を学内ホームページ等で紹介し、教職員の意識啓蒙を図る。 		<ul style="list-style-type: none"> 施設の有効活用の推進を図るため「小樽商科大学施設の有効利用に関する規程」を制定した。 ホームページに施設の有効利用を図っている他の事例を掲載し、教職員に啓蒙した。
<ul style="list-style-type: none"> 施設設備の劣化状況を調査する。 		<ul style="list-style-type: none"> 安全性・劣化性等の調査項目、点数化による評点方法を検討して、施設の劣化状況の現地調査を行った。

2. 安全管理に関する実施状況

年度計画	進行状況	判断理由（実施状況等）
<ul style="list-style-type: none"> 学生の安全に関する諸 		<ul style="list-style-type: none"> 職員の安全・健康を確保するため、「安全衛生管理規程」を制

<p>規程を見直す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 安全点検マニュアルの作成と安全管理体制の確立を図る。 危機管理マニュアルを作成する。 学生・教職員に対して安全意識の啓蒙を図る。 	<p>定するとともに、学生の安全管理に特化した「学生のための安全マニュアル」を作成し、大学全体の安全管理体制の整備を図った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 労働安全衛生法に基づき、衛生委員会において点検マニュアルを作成して定期的に点検を行った。 「危機管理規程」、「危機管理ガイドライン」を作成し、HPに掲載し学生・教職員に対して安全意識の啓蒙を図った。
<ul style="list-style-type: none"> 建物・設備装置・什器類のほか、官用自動車・小型船舶等、本学が所有する財物全体のリスクマップを詳細に把握する。 費用対効果を念頭に保険内容、保険金額を決定の上、必要となる保険に加入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学が所有する財物等のリスクマップを作成し、詳細に検討して必要な保険に加入した。
<ul style="list-style-type: none"> 学内規程の「毒物及び劇物取扱要領」の見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 毒物・劇物を扱う部所の実態の把握を行い、新たな「毒物及び劇物取扱要項」を制定し、点検を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 安全管理に関する広報活動の一環として、学内メール等を介した相談窓口を設置する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「危機管理ガイドライン」をHPに掲載して、相談窓口を設置した。
<ul style="list-style-type: none"> 学生・教職員等の安全に対する意識を向上させるよう、学内規程に定める防火訓練、防災訓練、救急救命訓練等の教育訓練を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生・教職員等の安全に対する意識を向上させるため、全学（学生、教職員参加型）を対象に総合防災訓練を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 大学施設内における瑕疵や業務執行上の過失事故を想定し、学生・教職員等に対する傷害事故、自動車事故等の賠償事故となる損害リスクを洗い出し、該当の保険に加入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 想定しうるリスクを洗い出しリスクマップを作成し、詳細に検討して必要な保険に加入した。
<ul style="list-style-type: none"> 危機管理マニュアルを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> リスク管理のあり方について検討し、学生向けの安全及び危機管理マニュアルとして「学生のための安全マニュアル」を作成した。

．予算（人件費見積含む。）、収支計画及び資金計画

1．予算

（単位：百万円）

区 分	予算額	決算額	差 額 (決算 - 予算)
収入			
運営費交付金	1,504	1,504	0
施設整備費補助金	522	21	501
船舶建造費補助金			0

施設整備資金貸付金償還時補助金			0
国立大学財務・経営センター施設費交付金			0
自己収入	1,366	1,385	19
授業料・入学金及び検定料収入	1,347	1,357	10
附属病院収入			0
財産処分収入			0
雑収入	19	28	9
産学連携等研究収入及び寄附金収入等	42	104	62
長期借入金収入			0
目的積立金取崩			0
計	3,434	3,015	420
支出			
業務費	2,870	2,762	108
教育研究経費	2,187	1,954	233
診療経費			0
一般管理費	683	808	125
施設整備費	522	21	501
船舶建造費			0
産学連携等研究経費及び寄附金事業費等	42	82	40
長期借入金償還金			0
国立大学財務・経営センター施設費納付金			0
計	3,434	2,866	569

2. 人件費

(単位：百万円)

区 分	予算額	決算額	差額 (決算 - 予算)
人件費(承継職員分の退職手当は除く)	1,979	1,916	63

3. 収支計画

(単位：百万円)

区 分	予算額	決算額	差額 (決算 - 予算)
費用の部	2,805	2,855	50
経常費用	2,805	2,840	35
業務費	2,684	2,625	59
教育研究経費	599	478	121
診療経費			0
受託研究経費等	10	34	24
役員人件費	55	52	3
教員人件費	1,418	1,341	77
職員人件費	602	718	116
一般管理費	118	134	16
財務費用		2	2
雑損			0
減価償却費	3	77	74

臨時損失		15	15
収益の部	2,805	2,995	190
經常収益	2,805	2,955	150
運営費交付金	1,414	1,461	47
授業料収益	1,133	1,185	52
入学金収益	160	163	3
検定料収益	34	29	5
附属病院収益			0
受託研究等収益	10	43	33
寄附金収益	32	30	2
財務収益			0
雑益	19	33	14
資産見返運営費交付金等戻入	3	2	1
資産見返寄附金戻入			0
資産見返物品受贈額戻入		5	5
臨時利益		39	39
純利益		139	139
目的積立金取崩益			
総利益		139	139

4. 資金計画

(単位：百万円)

区 分	予算額	決算額	差 額 (決算 - 予算)
資金支出	3,462	3,062	400
業務活動による支出	2,802	2,454	348
投資活動による支出	632	342	290
財務活動による支出		75	75
翌年度への繰越金	28	189	161
資金収入	3,462	3,062	400
業務活動による収入	2,912	3,012	100
運営費交付金による収入	1,504	1,504	0
授業料・入学金及び検定料による収入	1,347	1,357	10
附属病院収入			0
受託研究等収入	10	43	33
寄附金収入	32	31	1
その他の収入	19	74	55
投資活動による収入	522	21	501
施設費による収入	522	21	501
その他の収入			0
財務活動による収入			0
前年度よりの繰越金	28	28	0

・短期借入金の限度額
実績なし。

・重要財産を譲渡し，又は担保に供する計画
譲渡等なし。

・剰余金の使途
該当なし。

・その他

1．施設・設備に関する状況

施設・設備の内容	決定額(百万円)	財 源
小規模改修 災害復旧工事	総額 19	施設整備費補助金 (19百万円)

2．人事に関する状況

「業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置」P 29
～ 31 参照

・関連会社及び関連公益法人等

1．特定関連会社

特定関連会社名	代表者名
なし	

2．関連会社

関連会社名	代表者名
なし	

3．関連公益法人等

関連会社名	代表者名
なし	

国立大学法人会計基準における特定関連会社，関連会社及び関連公益法人とうについて記載すること。